

一戸 謙三 (いちのへ・けんぞう)

1、プロフィール

詩人。大正中期県詩壇の草分けであるパストラル詩社を興し、福士幸次郎の影響で自由詩、方言詩、四行詩、訳詩を発表。西洋前衛詩の摂取がその詩風の基礎をなしていた。

<生没>

1899(明治 32)年2月 10 日 ~ 1979(昭和 54)年 10 月1日

<代表作>

方言詩集『ねふた』

詩集『歴年』『自撰一戸謙三詩集』

<青森との関わり>

黒石町(現黒石市)に生まれる。地方性を極めて具体的な形で詩に生かした功績は特筆されてよい。

2、作家解説

筆名、玲太郎。明治 38 年弘前市朝陽小学校に入学後、家の転住に伴い、小学校を黒石、蔵館と転校。43 年朝陽小学校に戻り、44 年卒業。大正6年弘前中学校卒業。7年慶応大学医学部予科に入学、福士幸次郎の詩集『太陽の子』に感動。

8年木造に帰省、後藤健次らとパストラル詩社を結成、福士幸次郎の指導を受ける。この年は歌誌「黎明」に若原純郎の号で短歌を発表。

9年家の都合で休学し帰郷、黒石小学校に勤め、黒石の文芸誌「胎盤」に参加、詩、訳詩を発表。また、パストラル詩社の詩集第一集『田園の秋』以下第四集までが出版される。10年パストラル詩社詩集第五集『雲間を洩るる光』出版。

11年上京、農商務省商事課に勤務したが、「黎明」「胎盤」への詩稿多く、多産の年。翌年農商務省を辞して帰郷。引き続き「黎明」に投稿。

15 年福士幸次郎の「地方主義の行動宣言書」を受ける。その紹介で高木恭造を知る。

昭和5年、県下文芸誌「座標」の編集委員となり、詩、評論を発表。

6年第一次「北」同人、8年、第二次「北」同人。「府」同人。

9・10 年方言詩集『茨の花コ』以下第五集まで出版（第四集『弘前』第五集『悪童』は 10 年）。9年謙三の命名による方言詩誌「芝生(かがわら)」創刊（翌年以降休刊）。11 年方言詩集『ねふた』を出版。

13 年「聯」同人。翌年、「月刊東奥」の方言詩選者（伊豆能平）となる。

21 年福士幸次郎死去、満州より引き揚げの高木恭造と再会する。22 年『追憶帖』（韶山房）、『追憶帖』（雪の社）出版、23 年詩集『歴年』を出版。

35 年第二回青森県文化賞を受賞。37 年第五回青森県褒賞を受賞。

54 年 10 月 1 日心不全のため死去。

3、資料紹介

○『ねふた』

図書

1936(昭和 11)年5月 30 日

192mm × 130mm

津軽方言詩集。装丁棟方寅雄。序詩「弘前」ほか 28 編収録。「弘前」は福士幸次郎の地方主義思想を背景にしているのみならず、その「日本音数律論」を根底に据えた代表作である。